小さな拠点
「しきしまの家」から始まる山村の未来

中日新聞社賞

しきしまの家運営協議会

https://shikishima.org/

人口減少・高齢化により消滅に向かう山村を、幸せな暮らしの場として次世代につなぎたい。豊田市内で最も過疎の進行が著しい世帯数315戸、人口846人の敷島自治区が、10年以上にわたる活動から導いた答えは、縮小を受け止め、住民同士が支え合い、都市とつながる新たな自治のあり方「関係自治」でした。

2010年、「しきしま♡ときめきプラン」策定を機に始まった定住対策は、10年間で40世帯の移住をもたらし目的が達成されたかに見えました。しかし、人口の奪い合いは、過疎の解決には無力でした。

2023年4月に、小さな拠点「しきしまの家」をクラウドファンディング、住民のDIYで整備、縮小社会を受け止め、住民の支え合いと関係人口を自治の主体に加える取組みは、草刈りや高齢者の移動支援など3年で500件の支え合いを生みました。そして、生産者と消費者がつながる米のCSA（地域支援型農業）「自給家族」は、契約者が350家族に達し、30tの米の供給、10haの農用地保全につながり、運営財源の基盤にもなっています。また、併設するレストラン「ふらっとyui」には、年間13,000人の老若男女が集い、「共食」の場として、地域内外をつなぐ新たなネットワークを生み出しています。

「しきしまの家」のキャッチフレーズは「地域の絆が都市とつながり未来を拓く」、過疎に立ち向かう全国の山村に希望とエールを送ります。

2023年4月、支え合いの拠点として「しきしまの家」が住民200名を集めてオープンした。

米のCSA「自給家族」は、23戸の農家と350世帯の消費者がつながり10haの農地を守る。

「共食」の場、レストラン「ふらっとyui」には、年間13,000人の老若男女が集う。

高齢者の移動支援は、2025年12月、公共ライドシェアとして本格スタートした。